

竹山道雄の年譜と著作年表の補遺

平川 祐弘

補遺作製のきっかけ

竹山道雄（一九〇三年七月十七日—一九八四年六月十五日）はなによりも戦後日本の国民文学の古典となった『ピルマの豎琴』の作者として世に知られるが、多岐にわたる活動をした知識人であった。戦前・戦中・戦後は第一高等学校教授として生徒の信望を集め、戦後も日本論壇の自由主義の雄として筆陣を張った。昭和十五年にドイツ・ナチズムを平然として批判したドイツ文学者竹山は、その後も左右両翼全体主義の批判者として「時流に反して」語り続けた。その考察はユダヤ人焚殺とキリスト教の関係にまで及んだ。昭和五十九年、八十歳で亡くなった時も、『文芸春秋』の巻頭随筆をなお書き続けていた。

筆者は竹山の身内である関係で、アメリカのマサチューセッツ大学の歴史家リチャード・マイニア教授から二〇〇三年六月、思いがけず問い合わせを受けた。すなわち、一九五八年フロリダ大学歴史学部 J.A. Harrison の手でタイプ印刷の形で英訳が出まわったが書物の形をとるにいたらなかった竹山の『昭和の精神史』ほかをあらためて正確に英訳し *Takeyama reader* ともいうべき一冊の英文著書を出したい、との意向であった。これは牛村圭氏の山本

七平賞を授けられた『「文明の裁き」をこえて』（中央公論社、二〇〇〇年）の英訳が六本木の国際文化会館から二〇〇三年に刊行されて、それに序文を寄せた Richard H. Minear 教授が牛村氏がとりあげた竹山道雄の人と考え方に関心を寄せたことがきっかけである。私はその実現を祈り、竹山道雄の考え方が歪められることなく海外に伝わることを望み、ただちに先方に竹山の基礎的情報としては、一九八三年に『竹山道雄著作集』が福武書店から刊行された際、最終巻の第八巻に「年譜」と「著作年表」と「参考記事」が収められている旨を伝えた。しかしその資料の編者である私自身がいま読み返してみると、それらは竹山が亡くなる一年前に編まれたこともあって、もとより完全でなく、不備な箇所が目についた。その欠点があらためて意識されたので、この際、その後チェックした新資料、誤りの訂正、その他の補遺を編み、紀要の場を借りて発表させていただくこととした。私自身、竹山道雄の人と業績については一文をいつか一冊の評伝にとりまとめたいと考えている次第である。

竹山道雄著作の基礎文献

『竹山道雄著作集』と講談社学術文庫収録作品の題と目次内容と解説者氏名とは前述の資料中に収められていない。それで、初めにこの基礎文献の出版の経緯とともにまとめて掲げておく。

『竹山道雄著作集』全八巻は、福武書店から昭和五十八年三月から十一月にかけて刊行された。監修は林健太郎・吉川逸治の両教授となっているが、その二人の方の名前をあげて著作集刊行を實際に提案したのは粕谷一希氏である。粕谷氏は第一高等学校文科乙類に昭和二十三年入学した時に竹山氏からドイツ語を習い、中央公論社の編集者

としてもつきあいが深かった。昭和五十七年当時、福武書店が新企画を求めていることを知り、この著作集を出す知恵を粕谷氏が同書店の井上太郎氏に授け、私どもにも連絡した。編集実務は井上氏を中心に行なった。著作集の収録作品の選定には竹山氏の意向が働いているが、第八巻の美術関係は京都の社寺仏像などの写真の著作権の関係で収録作品が制約された節もある。

第一巻 『昭和の精神史』収録作品

昭和の精神史

妄想とその犠牲

ドイツ・新しき中世？

若い世代

ハイド氏の裁判

〈解説〉林健太郎

第二巻 『スペインの贖金』収録作品

スペインの贖金

イタリアめぐり

南仏紀行

スイスにて

中世のおもかげ

たそがれのパリ女たち

オランダの訪問

ベナレスのあたり

西の果ての島

高野山にて

四国にて

私の文化遍歴

囀と飛

〈解説〉芳賀徹

第三卷 『失われた青春』収録作品

失われた青春

幻影

国籍

智識人の裏切り？

憑かれた人々

空地

昭和十九年の一高

終戦の頃のこと

旧制一高の外国人学生たち

学生事件の見聞と感想

門を入らない人々

〈解説〉粕谷一希

第四卷 『縦の木と薔薇』収録作品

縦の木と薔薇

知られざるひとへの手紙

思い出

あしおと

蓮池のほとりにて

磯

川西瑞夫君の追憶

二十歳のエチュード

三谷先生の追憶

麻生先生のこと

岩元禎先生

鶴林寺をたずねて

矢内原さんの私が接した面

木村健康さん

安倍能成先生のこと

一つの秘話

最後の儒者

亡き神西清君のこと

堀辰雄君と私

片山敏彦さんの死

死について

ペンクラブの問題

〈解説〉高橋英夫

第五卷 『剣と十字架』収録作品

ベルリンにて

剣と十字架（抄）

聖書とガス室

消えてゆく炎

〈解説〉西義之

第六卷 『北方の心情』収録作品

独逸的人間

ゲーテに於ける自然と倫理

『ファウスト』の夜の場とニーチエ

老いたるロツテの悩み

ベツチーネ・フォン・アルニムのこと

ワグナーの弟子

イプセンの願望

希臘にて

不滅の風景画

デダルスの翼

將軍達と「理性の詭計」

シュプランガーのこと

神韻縹渺

バテレンに対する日本側の反駁

天皇制について

〈解説〉小堀桂一郎

第七卷 『ビルマの豎琴』収録作品

ビルマの豎琴

白磁の杯

〈解説〉清水徹

第八卷 『古都遍歴』収録作品

古都遍歴——奈良

作庭の歴史的系統の概略

竜安寺石庭

詩仙堂

六波羅蜜寺

海北友松

古都は警戒する

日本の肖像芸術

神魂神社

年譜

著作年表

〈解説〉吉川逸治

当初『竹山道雄著作集』は十二巻程度を計画していた時期があり、ニーチェやゲーテなどの翻訳まで入れることを検討したこともあった。実際、竹山氏は翻訳の名手で、氏の手になる翻訳で氏の逝去後も版を重ねた文庫版は幾つもある。しかし福武書店は売行きを懸念して弱気になり六巻の計画を提案、それで平川が芳賀徹・小堀桂一郎両氏に同道をお願いして福武書店に出向いて逆に説得し、結局全八巻の計画に落着いた。

しかし竹山家などで資料を探り著作年表の作成に当たっていた平川は、八巻以上を思い描いていたために、八巻本『竹山道雄著作集』から主要作品でありながら「焼跡の審問官」のように漏れた場合もあった。それを遺憾に思い、その漏れた著作は講談社学術文庫から引き続き出すこととなった。その案を積極的に推し進めてくれたのは学術文庫の池永陽一氏である。四冊のうち著者生前の希望による『歴史的意識について』は昭和五十八年十二月、『主役としての近代』は著者逝去直後の昭和五十九年十一月（編者平川祐弘まえがき、本間長世解説）、『尼僧の手紙』（平川祐弘解説）は昭和六十年一月、『昭和の精神史』（『手帖』も含む、仙北谷晃一解説）は昭和六十年七月に出た。以下に講談社学術文庫本四冊の収録作品を掲げる。

『歴史的意識について』収録作品

まえがき

昭和史と東京裁判

人間は世界を幻のように見る——傾向的集合表象——
ユダヤ人焚殺とキリスト教

追記 キリスト教は自己批判をするか？

感想文五つ

その一 アナール派について——ある歴史学派

その二 国体とは

その三 二・二六事件に思う

その四 エスカレーションという法則

その五 昔からの持ち味

人間性の普遍的基準

『主役としての近代』収録作品

新ソフィスト時代

春望

一つの証言

主役としての近代

高校生気質

焼跡の審問官

在米の安倍先生に

万葉集とゲーテは似ている？

詩の翻訳について

万葉集とゲーテは似ている？

初期の蘭学

私の読みたい本

新聞のコラムから

「声」欄について

みせびらかし

異国にはふしぎなことがおこる

「声」欄について

安倍先生随聞記

外国人の日本文化批判

信仰と戦争

カーター大統領のキス

ベルリンの第二の壁についての推理

一神教だけが高級宗教ではない

白隠その他

浦上とゴッダの怒り

神道の意味について

生と死

死ぬ前の支度

『尼僧の手紙』収録作品

寄寓

馬鈴薯の花

出船

日月潭

大野俊一君の出征

塘沽にて——支那の風土と美

北京日記

尼僧の手紙

鎌倉礼賛

ラスコー洞窟の壁画

童画——絵について

高砂族——台湾旅行から帰って

台湾から見た中共

モスコの地図

ソウルを訪れて

『昭和の精神史』収録作品

昭和の精神史

手帖

陸に上って

小市民よ、どこへ行く？

暁への挨拶

今

日記

汚れた手

ローリング判事への手紙

「国が変わった」

日記

柔術・彩ある反映

はじめのおわり

和辻哲郎氏の『手帖』への序

次に『竹山道雄著作集』8の「年譜」「著作年表」「参考記事」の補遺を掲げる。本来は補遺だけでなく、それを加えた完成した形の「年譜」「著作年表」「参考記事」を印刷掲載すべきであろうが、長きに過ぎる。それで、『竹山道雄著作集』8『古都遍歴』福武書店、(昭和五十八年十一月発行)のP323からP394にいたる部分に挿入すべき新資料を掲載する。なお挿入すべきそれらの補遺の位置を明確化するために、昭和五十八年版の前後の文章もあわせて多少印刷する。ページ数はその昭和五十八年版のページ数である。挿入部分は前後に「」の括弧をつけた部分である。

年 譜

P 3 2 3

鮎がめだかのように泳いでいた。「この田代家は今では天竜市歴史散策路として保存され土曜・日曜・祝日のみ午前九時から午後四時まで開館している。天竜市二俣町鹿島四八九」

P 3 2 6

「日月潭」

P 3 2 9

内容的にも語学的にも秀れた教科書は……ゲーテ『ミニヨン』とヘッセ『ペーター・カール・メンチント』『とシュニツラー』『盲目のジェローニモとその兄弟』で、学生も喜んだ。

P 3 3 0

昭和十三年 雲崗の石仏を訪問したのが大きな体験となった。「ヒトラー・ユーゲントが一高を訪問した。」(昭和十五年は誤り)

P 3 3 1

「ビルマの豎琴」……市川昆監督の手で映画化され、ヴェネチア映画祭(一九五六年度)でサンジョルジョ賞を得た。「市川監督は一九八五年度にはカラーで新しい俳優で再び映画化し国内的には以前にまさる成功をおさめた。」

P 3 3 3

パリでは四半世紀前に泊った下宿を再訪した。「ソリナック夫人といった。以後しばしば会いに行った。昭和五十年ごろ亡くなった。」

P 3 3 6

昭和五十八年 菊池寛賞を受賞した。「芸術院会員に選ばれた。秋、夫人保子、娘依子と婿平川と一緒に京都へ旅行した。」

昭和五十九年 三月末肝硬変で東京厚生年金病院に入院し、四月半ば退院した。五月二十六日の『毎日新聞』夕刊に「死ぬ前の支度」を書いた。六月十五日定期健診のため鎌倉から車で病院に赴き、到着直後保子夫人が車椅子を探しに行っている間に意識を失い、夜七時五十二分亡くなった。肝臓癌なども生じていた。六月三十日葬儀が神道により信濃町千日会堂で行なわれた。」

著作年表

p 338

「ラスコー洞窟の壁画」

p 339

「ビルマの豎琴 扶桑社 昭和六〇年 平川「諸版の異同について」、市川昆・竹山保子「対談」

ビルマの豎琴 新潮社 昭和六三年 七十五刷改版 平川「『ビルマの豎琴』余聞」、牛村圭注解 作品に出てくる

歌の歌詞と楽譜」

p 339

「石川欣一英訳とユネスコ叢書にはいったヒベット英訳 (*Harp of Burma* tr. by Howard Hibbett, Charles E. Tuttle Co., 1966) のほかに中国語訳 (『緬甸的豎琴』劉華亭訳、台北、星光出版社、1989)、『スペイン語訳 (*El**Arpa de Birmania* tr. Fernando Rodriguez-Izquierdo Gavala, Editorial Universidad de Sevilla, 1989)、『バスマン

語訳 (Birmaniano harpa, Bruño Argitaletxea, 1990)、『タイ語訳 (明子ルノアピラック訳、ブラッグルン校訂、

199x)、『フランス語訳 (*La Harpe de Birmanie*, tr. Hélène Morita, Le Serpent à Plumes, 2002)』

p 341

歴史的意識について

「主役としての近代 (講談社学術文庫、昭和五九年)

尼僧の手紙 (講談社学術文庫、昭和六〇年)

- 昭和の精神史（手帖を含む）（講談社学術文庫、昭和六〇年）
p 342
- 「若きウエルテルの悩み」
p 345
- 「日月潭 大正一五年九月」
p 346
- 「ゲーテのヴェネチア詩抄 アカツキ 昭和一〇年九月」
p 346
- 「我等の語学文化『学生と語学』矢の倉書店 昭和一三年八月」
p 346
- 「シュヴァイツァー『わが生活と思想より』序文 昭和一四年」
p 349
- 「主役としての近代 近代文学 昭和二三年一月」
p 366
- 「文化の形態と接触『日本文化研究』第一巻」
p 369
- 「人間について 在家仏教 昭和四〇年一月」
p 375

- 〔紺屋の白ばかま 池田弥三郎編『百人百話』昭和五十一年 PHP研究所〕
P 376
- 〔人間性の普遍的基準 正論 昭和五十八年六月〕
P 376
- 〔昭和史と東京裁判 仏訳 *Cahier du Japon Numéro Spécial 1984*〕
P 376
- 〔昔からの持ち味 言論人 昭和五十八年六月五日・十五日〕
P 376
- 〔彼等の側の印象〕昭和一三年のヒットラー・ユーゲント―高訪問記の未発表原稿 向陵 昭和五十八年一〇月 小堀桂一郎解説〕
P 376
- 〔カーター大統領のキス 文芸春秋 昭和五十九年四月〕
P 376
- 〔ベルリンの第二の壁についての推理 文芸春秋 昭和五十九年五月〕
P 376
- 〔一神教だけが高級宗教ではない 文芸春秋 昭和五十九年六月〕
P 376
- 〔白隠その他 文芸春秋 昭和五十九年七月〕

p 376

〔浦上とゴッダの怒り 文芸春秋 昭和五九年八月〕

p 376

〔神道の意味について 正論 昭和五九年八月〕

p 376

〔尊敬する菊池さん『菊池栄一著作集』3月報 昭和五九年九月〕

新聞発表一覧

p 377

〔生き残った人々に希う『きけわだつみのこえ』日本読書新聞 昭和二四年一〇月二二日〕

p 377

〔夫婦の愛情〕

p 378

〔谷川さんからの手紙 朝日新聞コラム 昭和三四? 三五?〕

p 378

〔異国にはふしぎなことがおこる 日曜時評 昭和三七年一二月二三日〕

p 378

〔普遍的な美德 読売新聞 昭和三九年? 随想全集〕

P 380

〔生と死 サンケイ新聞 昭和五九年一月二三日〕

P 380

〔お元気ですね 毎日新聞 昭和五九年三月七日〕

P 380

〔死ぬ前の支度 毎日新聞 昭和五九年五月二六日〕

座談会・対談一覧

P 381

〔現代史講座別巻 創文社 昭和二七? 二八?〕

P 392

〔東の正義・西の正義 対談者 西義之 小堀桂一郎 正論 昭和五七年十二月〕

参考記事

P 393

- 〔サン写真新聞 一高特集 昭和二三年三月二三日〕
p 393
- 〔竹山道雄『ビルマの豎琴』中央公論社昭和二三年三月版 ともだち文庫 挿絵 猪熊弦一郎 竹山家に残されいま平川家にある一冊の84ページに竹山氏の筆跡で \$ 4 is an exceptionally touching story. The best of this group, both in phrasing and interest. Well written. Wheeler & me〕
p 393
- 〔関英雄 竹山道雄著『ビルマの豎琴』人間愛の調べ 少年少女たちへの好読物 読書新聞? 図書新聞? 昭和二三年〕
p 393
- 〔竹山道雄『ビルマの豎琴』新潮 昭和二三年九月〕
p 393
- 〔渡邊一夫 竹山道雄『憑かれた人々』展望 昭和二四年六月 後に『架空旅行記など』昭和二四年改造社に収められる〕
p 393
- 〔田中隆尚『茂吉随聞』下巻、筑摩書房、昭和五〇年刊、昭和二四年、五年〕
p 393
- 〔小野二郎 東大教養新聞? 昭和二五年?〕
p 394

〔室生犀星 交錯する詩情、非情 読売新聞 昭和三七年一月二十九日夕刊〕

P 394

〔村松剛 解説『随想全集』小学館 尚学図書 昭和四五年〕

P 394

〔高橋英夫 書評『乱世の中から』論展三号 昭和四九年七月〕

P 394

〔鈴木孝 ビルマという国 PHP研究所 昭和五二年〕

P 394

〔西尾幹二 竹山道雄『日本近代文学大事典』講談社〕

P 394

〔高橋英夫 偉大なる暗闇―師岩元禎と弟子たち― 新潮 昭和五八年一二月〕

P 394

〔高橋英夫 複眼の獲得 新潮 昭和五九年五月〕

『竹山道雄著作集』月報

1 佐伯彰一 操守一貫の人 勝田竜夫 誰一人として戦争を欲しなかった？ 鳥海靖「紙の実弾」・「鉄の実弾」

2 市原豊太 竹山君 菊池栄一 駒場の竹山道雄さん 山室静 感謝と希望

- 3 河盛好蔵 思い出すこと 松下康雄 四十年来の師 本間長世 竹山先生に学ぶ
- 4 江藤淳 掲載禁止になった「ハイド氏の裁き」 本多秋五 政論と美術論 いいだもも 竹山先生
- 5 会田雄次 竹山道雄先生と私 佐瀬昌盛 昭和三十年代初期の駒場における竹山道雄先生 松本道介 見て感じて考える
- 6 森本哲郎 ミネルヴァの梟 西尾幹二 竹山先生からの手紙 アルバムから
- 7 富士川英郎 あれこれ 鈴木重信 二・二六事件をめぐる 小山いと子 祖母から孫まで
- 8 石原萌記 竹山道雄先生のこと 竹山道雄 あとがきにかえて

竹山道雄が昭和五十九年六月十五日に死去した後に出た記事

- 本多秋五 思い出断片 新潮 昭和五九年八月
- 高橋英夫 認識と遍歴 新潮 昭和五九年八月
- 加藤幸子 『ビルマの竖琴』と私 昭和五九年八月
- 小堀桂一郎 感謝と追憶 新潮 昭和五九年八月
- 平川祐弘 竹山先生のこと 新潮 昭和五九年八月
- 清水徹 竹山先生のこと 文学界 昭和五九年八月
- 高橋英夫 追想竹山道雄先生 新潮45 昭和五九年八月
- 山室静 竹山道雄さんのこと 海燕 昭和五九年八月

芳賀徹 竹山先生、さようなら 海燕 昭和五九年八月

高橋英夫 「人間」を思索した生涯 朝日新聞 昭和五九年六月一九日

小堀桂一郎 読売新聞 昭和五九年六月一九日

西尾幹二 東京新聞 昭和五九年六月一九日

芳賀徹 神奈川新聞（共同通信） 昭和五九年六月二四日

高野正雄 竹山道雄さんの「死ぬ前の支度」毎日新聞 昭和五九年六月二九日

小堀桂一郎 言論人

野沢豊吉 世界と日本 昭和五九年七月一六日

市原豊太 神社新報 昭和五九年七月三一日

菊池栄一 さようなら竹山道雄先生 弔辞 諸君 昭和五九年九月

林健太郎 さようなら竹山道雄先生 弔辞 諸君 昭和五九年九月

上林吾郎 さようなら竹山道雄先生 弔辞 諸君 昭和五九年九月

芳賀徹 さようなら竹山道雄先生 弔辞 諸君 昭和五九年九月

田中美知太郎 談 竹山道雄氏を悼む

平川祐弘 『ビルマの豎琴』余聞 新潮 昭和六〇年一月

富士川英郎 都雅で、重厚の人 文化会議 昭和六〇年一月

仙北谷晃一 美しい魂 文化会議 昭和六〇年一月

徳岡孝夫 『ビルマの豎琴』と朝日新聞の戦争観 諸君 昭和六〇年九月

- 上野晴夫 『ビルマの豎琴』 論争 朝日からの反論 諸君 昭和六〇年一〇月
- 平川祐弘 竹山家から朝日「声」欄へ 諸君 昭和六〇年一二月
- 辻村明 朝日新聞「声」欄・公平の仮面 諸君 昭和六〇年一二月
- 昭和史の家 竹山道雄 高潔な思想家の静かなる住居 撮影垂見健吾 文芸春秋 昭和六一年九月
- 仙北谷晃一 竹山道雄の文化遍歴 諸君 昭和六一年一二月
- 高橋英夫 竹山道雄 増補改訂新潮日本文学辞典 昭和六三年一月刊
- 高橋英夫 人間性の探求 小学館「昭和文学全集」二八巻解説 平成一年六月
- 牛村圭 竹山道雄の東京裁判 中央公論 平成二年一月
- 西義之 二十八年前の『朝日』の壁 新潮45 平成三年一月
- 高橋英夫 昭和の精神史 ビルマの豎琴 明治書院日本現代文学大事典 平成六年六月
- 正木恒夫 『植民地幻想』 みすず書房 平成七年
- 平川祐弘 竹山道雄 美しき日本人50の肖像 文芸春秋 平成七年八月
- 坪内祐三 戦後論壇の巨人たち 諸君 平成九年四月 グラビア写真と解説
- 河野徹 in *The World Reacts to the Holocaust 1997*
- 川端康成・三島由紀夫往復書簡 平成九年 三島が「希臘にて」に言及
- 保坂正康 『昭和の精神史』 歴史を見る眼の原点 産経新聞 平成一〇年一月一〇日
- エドワード・サイデンステッカー バランス感覚 アステイオン 平成一〇年冬
- Sukehiro Hirakawa, "Prisoners in Burma" *Japan Echo*, December 1999

- ムルハーン千栄子 外からみる故郷 西日本新聞 平成一二年一月二一日
- Sukehiro Hirakawa, "The Image of the Former British Enemies in Takeyama Michio's *Harp of Burma* (1948)", in Meng Hua and Sukehiro Hirakawa ed., *Images of Westerners in Chinese and Japanese Literature*, Amsterdam and Atlanta GA, Editions Rodopi, 2000.
- 石原慎太郎 わが人生の時の人々 第二回 講演旅行 文士たちの生態 文芸春秋 平成一二年四月
- 牛村圭 『「文明の裁き」をこえて』中央公論社 平成一二年
- 高田里恵子 『文学部をめぐる病い』松籟社 平成一三年
- 竹山千代 『埋火の記』五、忘れ得ぬ音楽会 平成一三年九月二〇日刊私家版
- 平川依子 父の封筒——竹山道雄の思い出『文芸春秋』平成一四年四月臨時増刊「家族の絆」
- Ushimura Kei, *Beyond 'the Judgment of Civilization'* Tokyo, International House, 2003
- 高橋英夫 ギリシア―「青春」の思索 図書 平成一五年八月
- 高橋英夫 運命の三つの相 図書 平成一五年九月
- 高橋英夫 月色溶々花影動 図書 平成一五年一〇月
- 小堀桂一郎 將軍マッカーサーの述懐とヘレン・ミアーズ 正論 平成一六年一月
- サイデンステッカー自伝 『流れゆく日々』時事通信社出版局
- 高橋英夫 ビルマの豎琴 明治書院現代小説大事典
- 平川祐弘 書物と私 熊本日日新聞 平成一六年一月八日夕刊、一月二五日夕刊、一月二二日夕刊
- 里縞政彦 日本人よ、志に生きよ 自由 平成十六年四月

ほかに「高同窓会雑誌『向陵』や『ももんが』にも竹山道雄の名前は出てくる。